SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

ＬＯＶＥ　ＬＩＦＥ

2022 年／日本映画
配給：エレファントハウス／123 分

2022（令和４）年９月 10 日鑑賞	TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２２－１０５

監督・脚本：深田晃司
出演：木村文乃／永山絢斗／砂田アトム／山崎紘菜／嶋田鉄太／三戸なつめ／神野三鈴／田口トモロヲ／福永朱梨／森崎ウィン

みどころ

近時は濱口竜介監督の注目度が高いが、深田晃司監督を忘れてはダメ。『歓待』（１０年）で注目してから１０年以上経ったが、彼の成長度はすごい。

それにしても、『ＬＯＶＥ　ＬＩＦＥ』とは大層なタイトルだが、彼は矢野顕子の名曲を基に「どんなに離れていても、愛することはできる」のモチーフをスクリーン上に如何に表現、演出していくの？

私は、深田監督のチャン・イーモウ監督と同じような“女優発掘能力”に注目しているが、本作のそれは木村文乃。また、深田作品ではいつも“闖入者”に注目だが、本作のそれは韓国人のろう者で、元夫という設定だ。愛する息子の葬儀の席に、いきなりそんな“闖入者”が登場してくれば・・・。

面白いストーリー展開の中で、ラストに浮かび上がってくる、さまざまな“ＬＯＶＥ　ＬＩＦＥ”とは？それはあなた自身の目でしっかりと。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪▫■日本のエースは濱口竜介監督の他、深田晃司監督も！■▫▪

私は、『シネマ４６』第４章の目次を「中国映画がすごい！若手の注目監督が次々と！」としたうえ、①『凱里ブルース（路辺野餐／Kaili Blues)』（１５年）と『ロングデイズ・ジャーニー　この夜の涯てへ（地球最后的夜晚／LONG DAY’S JOURNEY INTO NIGHT)』（１８年）の毕赣（ビー・ガン）監督、②『象は静かに座っている（大象席地而坐／An Elephant Sitting Still)』（１８年）の胡波（フー・ボー）監督、③『巡礼の約束（阿拉姜色／Ala Changso)』（１８年）のソンタルジャ監督、④『ザ・レセプショニスト（THE RECEPTIONIST／接線員)』（１７年）の盧謹明（ジェニー・ルー）監督、の４人を取り上げた。また、『シネマ４８』の「第６章　韓国映画」では、≪若手女性監督の躍進に注目！≫として、『夏時間』（１９年）のユン・ダンビ監督と『チャンシルさんには福が多いね』（１

９年）のキム・チョヒ監督を取り上げた。

それらに対して、日本の若手監督の躍進は？近時の邦画はいわゆる“製作委員会方式”によるコトなかれ主義と、ネタ不足、脚本不足による“原作主義”が蔓延し、大ヒットアニメへの依存度が高まる中、ミニシアターの衰退が続いている。東京の岩波ホールの閉鎖に続き、大阪でも９月末にテアトル梅田が閉館することになった。すると、日本の映画界は絶望的？？？

そんな心配もあるが、２０２１年の第７４回カンヌ国際映画祭で脚本賞の受賞で大躍進した『ドライブ・マイ・カー』（２１年）（『シネマ４９』１２頁）の濱口竜介監督の明るいニュースもある。また、私は見逃していたが、『PLAN７５』（２２年）の早川千絵監督も、第７５回カンヌ国際映画祭オフィシャルセレクション「ある視点」部門に正式出品され、初長編作品に与えられるカメラドールのスペシャルメンション（次点）に選出されたことによって近時俄然注目されている。そんな中、私の大好きな深田晃司監督の最新作たる本作が公開されたから、こりゃ必見！

■□■深田監督作品の特徴は？今回の女優は？■□■

私が最初に深田監督に注目したのは、『歓待』（１０年）を観た時（『シネマ２７』１６０頁）。その「みどころ」で、私は、「単館に名作あり！監督も俳優も全く知らなかったが、日常的に張っている私のアンテナにひっかかった本作は最高！園子温監督の問題作『冷たい熱帯魚』（１０年）と対比しながら、「闖入者二態」をしっかり楽しみ（恐がり）たい。人脈があり、才能があり、アイデアさえあれば、こんな個性的かつ魅力的な映画製作が可能！主演の他、２６歳にしてプロデューサー役を務めた杉野希妃や８０年生まれの深田晃司監督、そして若手劇団員たちの芝居への熱意とエネルギーに注目し、それを応援したい。」と興奮しながら書いた。同作に続く『ほとりの朔子』（１３年）（『シネマ３２』１１５頁）では私の大好きな二階堂ふみを起用し、『淵に立つ』（１６年）（『シネマ３８』７９頁）と『よこがお』（１９年）（『シネマ４５』１８１頁）では、新たなミューズになった筒井真理子を続けて起用したが、深田監督については、どの映画で、どの女優を起用するかも大きな注目点だ。

国際的に高い評価を得ている深田監督作品の特徴は、人間心理への深い洞察。そのため、自らが手掛ける脚本では、日常的な生活の中に意外な“闖入者”が登場したり、ややこしい人間関係が続いたり、起伏に富んだストーリー展開になることが多い。今時のくだらない純愛ものはミエミエの展開のものが多いが、彼の作品はそれとは真逆だから面白い。また美人女優が大好きな私は、前記の二階堂ふみ、筒井真理子に続いて本作ではどんな女優が起用されるのかが楽しみだったが、それが最近私が注目している女優・木村文乃だったから、私の期待は大！

■□■舞台は団地。闖入者は？どんなハプニングが？■□■

市役所の福祉課で働いている夫・大沢二郎（永山絢斗）とその隣にあるホームレス支援

を行う NPO で働いている妻・大沢妙子（木村文乃）が住んでいるのは、まるで１つの小さな町のように、住宅の棟が連なる、とある集合住宅。団塊世代の私には、まさに昭和を連想させる懐かしい風景だ。オセロの得意な一人息子の敬太（嶋田鉄太）との３人の生活は幸せそうだが、アレレ、敬太は妙子の“連れ子”らしい。そのため、向かい側の棟に住んでいる二郎の両親、大沢誠（田口トモロヲ）と明恵（神野三鈴）は、内心では妙子と二郎の結婚を心よく思っていないらしい。そのため、毎日広場を隔ててベランダ越しに挨拶をしている両家族の仲は一見良さそうだが、実は不安がいっぱい・・・？

しかして、妙子と二郎と敬太が家族になって１年が経とうとしている今日は、敬太のオセロ大会での優勝祝いと同時に、誠の６５歳の誕生日を祝うあるサプライズが予定されていた。優勝祝いの進行はプレゼントの受領を中心に予定通り。模型の飛行機をもらった敬太は大喜びだ。それに対して、市役所の友人たちの協力を得て準備された、誠の誕生祝いのサプライズは？さらに、それに続いて起きた、あっと驚くハプニング（不幸）とは・・・？

■□■息子の死は誰の責任？それを契機に何が崩壊？■□■

団地におけるベランダからの転落死。そんな痛ましいニュースを目にすることは多いが、浴室で模型の飛行機遊びをしていた敬太が浴槽内に転倒して頭を強打、そして、たまたまその浴槽内に水が溜まっていたため溺死。そんな姿（事故）を見るのは、私も本件がはじめてだ。居間では、誕生日祝いをしてもらっている誠がカラオケのマイクを握り、気分よく歌っていたのに・・・。

しかして、敬太死亡の責任は一体誰に？警察も事情聴取を進め、本件に事件性のないことを確認したが、たまたま風呂場に水を溜めていた妙子が、「私のせいだ！」と自分を責めたのは仕方ない。二郎はもちろん二郎の両親もそんな妙子を慰め励ましたが、これを契機に夫婦、親子間の気持ちの変化は如何に？

深田監督の人間観察力の鋭さ（意地の悪さ？）が光るのは、そんな導入部の展開の中に、二郎の元カノである山崎理佐（山崎紘菜）を絡ませたこと。当初は誠の誕生祝いのハプニング演出の応援要員に過ぎなかったが、直前になって理佐はドタキャン。そのため、かえって、二郎の元カノとしての存在感が浮き上がってしまったから、葬儀の席で理佐が妙子と目を合わせると、たちまちそこに火花が散ることに・・・。そんな状況下、まさかまさか二郎と理佐が密かに会っていようとは・・・？

■□■葬儀への“闖入者”は？その波紋とその広がりは？■□■

深田監督作品といえば“闖入者”だが、本作のそれは、葬儀の席に突然現れた妙子の元夫、パク・シンジ（砂田アトム）。二郎と再婚する前の妙子は、なぜ韓国人のろう者であるパクと結婚していたの？２人はどこでどんな生活をする中で敬太が生まれたの？それは本作では一切描かれないが、ある日、突然パクが妻子を捨てて失踪してしまったため、妙子と敬太が大きな打撃を受けたのは事実。そして、これを克服し、二郎と再婚できたのは、やっと１年前のことだ。

そんなパクが敬太の葬儀の席に現れたのは、オセロ大会での優勝という新聞記事をパクが見たためだが、そこでいきなり妙子を殴りつけた行為はいかがなもの？しかも、その後パクは団地近くの公園で寝泊まりしているようだから始末が悪い。それを知った妙子は、ずっと預かっていたパクの家族からの手紙を渡し、「本当にさようなら」と別れを告げたが、本当にそうできるの？

本作中盤は、生活保護の申請をしようとするパクの姿や、福祉課に勤める二郎がパクに仕事を紹介していく姿、そして、その中で再び妙子とパクとの接点が増していく姿が次々と描かれていくので、それに注目。

■□■三角関係のぶり返し？ひょっとして四角関係に？■□■

二郎がなぜ韓国人の夫から捨てられた（？）女・妙子を好きになったのかは私にはよくわからない。そして、それは、結果的に二郎に振られてしまった理佐も同じだろう。また、二郎が連れ子の敬太を愛していたのは間違いないようだが、妙子との間に子供が生まれたら、その仲はどうなるの？

そんな状況下、突然、敬太が死亡したのは、ある意味、二郎にとってラッキー・・・？現に、後日の告白によれば、二郎は敬太の死亡によって、妙子との間で子作りに励む意欲が湧いてきたと語っていたほどだ。ところが、二郎の今の目の前の現実は、突如現れたパクがズカズカと妙子や自分たちの夫婦生活の中に入り込んできているから、こりゃ腹立たしい。本作中盤で、深田監督の人間観察力の鋭さ（意地の悪さ？）が光るのは、ベランダに取り付けてある鳩防止のためのディスク越しに、引っ越した後の両親の部屋に妙子がパクを引き入れたうえ、イチャついている姿を二郎が目撃するシークエンスだ。こりゃ一体ナニ？なぜ、妙子は俺に内緒で、あんな勝手なことを！二郎がそう考えたのは当然だ。そんな中、葬儀以降、元カノの理佐が体調を崩して市役所を休んでいるとの情報に接すると・・・？これはひょっとして三角関係のぶり返し？さらには、ひょっとして四角関係に・・・？

■□■LOVE と LIFE は永遠のテーマ！モチーフはあの名曲！■□■

本作企画の根源は、矢野顕子の名曲『LOVE LIFE』にあるそうだ。LOVE＝愛、LIFE＝人生は、映画や小説の永遠のテーマで、その切り口によって、LOVE も LIFE も如何様にでも描くことができる。「名作映画百選」の中でも常にトップを誇っている『風と共に去りぬ』（３９年）も壮大な LOVE と LIFE の物語だ。しかして、「どんなに離れていても、愛することはできる」をテーマにした矢野顕子の名曲『LOVE LIFE』の歌詞をしっかり味わいたい。

『ドライブ・マイ・カー』の後半は北海道へのロードムービーだった。他方、第９４回アカデミー賞作品賞、助演男優賞、脚色賞を受賞した『コーダ　あいのうた』（２１年）（『シネマ５０』１２頁）は、本物のろう者を起用したことが大きな話題だった。しかして、本作中盤以降は妙子とパクとの手話による会話が登場する。妙子とパクは手話を通じて気持

ちを伝え合うことができるが、手話のできない二郎は妙子の通訳を通じてしかパクと話し合うことはできないから、何かと意思疎通は難しい。

　そのこともあって、本作後半、「父親が危篤だ」との連絡を受けて、パクが韓国に戻るシークエンスになると、各人各様の LOVE LIFE を巡って、さまざまな意外性が次々と露呈してくるので、それに注目。その最たるものは、旅費を貸してやったうえ、船に乗り込んだパクを見た妙子が、「パクを一人にしておくことはできない！」と叫んで船に乗り移っていくシーン。こんな LOVE LIFE が現実になれば、それはヤバいのでは？少なくとも二郎と妙子の家庭は崩壊してしまうはずだが、さあ、本作はラストに向けてそこからどう進んでいくの？そう思っていると、何と、韓国で妙子が見た、あっと驚く風景とは・・・？おいおい、パクくん、それはないだろう・・・。そう思ったが、本作はそんな意外な展開の中で、さまざまの意外な “LOVE LIFE” の結末を見せてくれるので、それはあなた自身の目でしっかりと。

２０２２（令和４）年９月１６日記